

## 出エジプト記5-6章 「神に敵対する世」

### 1A ますます悪くなる世 5

1B 「神はいない」 1-9

2B ますます増える苦しみ 10-17

3B 神への訴え 18-31

### 2A それでも働かれる神 6

1B 「わたしは主」 1-13

2B モーセとアロンの系図 14-30

## 本文

私たちの学びは、出エジプト記5章に入ります。出エジプト記を通して、世からの贖いを見ています。私たちが生きている世を知り、そして私たちがその中で、神の民として生きているということを見て行っています。モーセは、アロンと共にエジプトに戻ってきました。そして、主によって召されたことを告げ、その前で印も行ないました。彼らは主が戻って来てくださったことに深い慰めを受け、主を礼拝しています。「ひざまずいて礼拝した」と言っていますね。しかし、ここからが戦いです。一度、主を信じて、この方の前にひざまずいても、この世からの圧力というのは、むしろ主にひれ伏した時から始まるからです。5章は、モーセとアロンが初めてファラオのところに行った時の記録があり、6章はモーセが落胆してしまって、主に訴えている場面が出てきます。

### 1A ますます悪くなる世 5

1B 「神はいない」 1-9

1 その後、モーセとアロンはファラオのところに行き、そして言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられます。『わたしの民を去らせ、荒野でわたしのために祭りを行えるようにせよ。』」2 ファラオは答えた。「【主】とは何者だ。私とその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならないとは。私は【主】を知らない。イスラエルは去らせない。」

モーセとアロンは、ファラオのところに行きました。それがどこか分かりませんが、公の場であり、王が裁きの座に着いて、民を裁き、治めるところであったのでしょう。そこで、イスラエルの神の名、ヤハウェによって、民を出させるように命じています。主なる神は、はっきりとイスラエル人を「わたしの民」と言い、彼らの行う祭りを「わたしのための祭り」と言っています。主は、ご自身の所有であることをはっきりと語られています。そもそも、すべてが主のものです。パロもエジプトも主のものです。そして、神はイスラエルの民と契約を結ばれるということで、ますますご自身の神であるということです。そして、祭りは主ご自身に対するものです。主への礼拝のために、荒野に出て行かせなければいけないと命じられます。ここで、なぜ「荒野」であるかということ、後々に分かりますが、牛

や羊をいけにえに捧げるのですが、エジプト人は牛は神聖なものとみなしていたので、現地の人々につまずきを与えるからです。

ところがファラオは、「【主】とは何者だ。」また「私は【主】を知らない。」と言います。当時、エジプトのファラオは世界の超大国の主権者でした。そしてエジプトにおいては、ファラオ自身が神としてあがめられていました。なぜ、主なるものに聞き従わなければいけないのか？と、神の権威を認めていません。また知らない、と言っていますが、そんな神は知ったことじゃないとその存在を無視しています。これが、この世に属する者たちの心であります。しばしば無神論者という言葉が使われますが、それは欧米の世界の中で使われており、キリスト教の神があまりにも当たり前に入れているので、敢えて弁証して神はいないと証明しようとする試みです。しかし、ファラオの言っている主は知らないというのは、そういった知的なことではなく、「そんなもの知らねえ」というような、うざったい、やめてくれ、そんなこと語ってくれるな、という否認する心のことを言っています。そのような心に対して、詩篇の著者はこう言います。「10:4 悪しき者は高慢を顔に表し、神を求めません。『神はいない。』これが彼の思いのすべてです。」

3 彼らは言った。「ヘブル人の神が私たちと会ってくださいました。どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせて、私たちの神、【主】にいけにえを献げさせてください。そうでないと、主は疫病か剣で私たちを打たれます。」

モーセとアロンは、少しうろたえたのでしょうか、聞く耳を全く持たないので、主のことばを真っ直ぐに伝える代わりに、少し外交辞令的に語っています。エジプト人に神々がいるように、私たちヘブル人にも神がいる。だから、三日の間だけ荒野でいけにえをささげさせてください、と言っています。また、エジプト人に分かり易くするために、主に仕えなければ疫病や剣で打たれてしまう、という言い方をしています。

この時の圧迫といったら、ひとたまりも無かったことでしょう。詩篇には、「119:46 私はあなたのさとしを王たちの前で述べしかも恥を見ることはありません。」と言っています。力と主権のあるファラオの前で、主の諭を語るのにはとてつもない勇気が必要であったと思います。イエス様は、弟子たちに対して、王の前でも、総督の前でも証しをすることになることをお語りになり、事実、ペテロは宗教的権威者のサンヘドリンの前で、パウロはヘロデ王とローマの総督の前で語りました。権威者に対しても恐れかしくみつ、慎み深く、けれども確信をもって大胆に語ります。イエス様が言われましたが、人ではなく主を恐れるということ、これが大事です。

4 エジプトの王は彼らに言った。「モーセとアロンよ、なぜおまえたちは、民を仕事から引き離そうとするのか。おまえたちの労役に戻れ。」5 ファラオはまた言った。「見よ、今やこの地の民は多い。だからおまえたちは、彼らに労役をやめさせようとしているのだ。」

王の心では、まったく神を度外視した見方しかできません。主への礼拝を、「民を仕事から引き離そうとする」としかとらえることができませんでした。主への礼拝というのには、「自分たちではなく、神ご自身がすべての源であり、この方が支配者である」ということを認める、安息があります。自分のしていることをやめて、立ち止まって、それで実は自分ではなく神がおられて、神がなさっているのだということを知ることができます。しかし、神を認めない人の心には、それは怠けているとしか見えないのです。自分が何かを行っているということにしか、価値を見いだすことができないのです。何かを行うのを止めるということに、価値を見いだすことができないのです。

そして、ファラオには心で思いがよぎりました。イスラエルの民の数はさらに増えていました。それで、モーセとアロンが、イスラエル人の強制労働による生産量は変えることなく、休むことができるだろうと勝手に思っているだろう！と思ったようです。それで、彼らにそのような怠け心を起こされて、生産量を減らされてはたまったものではないと思って、次のように言いつけます。

6 その日、ファラオはこの民の監督たちとかしらたちに命じた。

ファラオは、時を伸ばすことはありませんでした。そうモーセとアロンに言い放った「その日」、同じ日に行動に移しています。「監督たち」というのは、文字通りには「追い立てる者」であります。奴隷を使役する者ということです。そして「かしらたち」というのは、その監督たちの下で動いている追い立て屋です。このかしらたちが、直接にはイスラエル人に当たります。

7 「おまえたちは、れんがを作るために、もはやこれまでのように民に藁を与えてはならない。彼らが行って、自分で藁を集めるようにさせよ。8 しかも、これまでどおりの量のれんがを作らせるのだ。減らしてはならない。彼らは怠け者だ。だから、『私たちの神に、いけにえを献げに行かせてください』などと言って叫んでいるのだ。9 あの者たちの労役を重くしたうえで、その仕事をやらせよ。偽りのことばに目を向けさせるな。」

当時のエジプト王朝の遺跡には、煉瓦が積み上げられた跡がありますが、そこに小さな穴があります。そこに藁が入っていて、藁が溶け去った後であると考えられます。藁が腐ることによって、酸が出て、酸によって煉瓦の粘土に粘着質が出て来るそうです。ファラオは、怠け心が出ているから祭りをしたいなどと言っているから、ならば、もっと働かせてそんなことを思う時間もなくせ、と思ったのでしょう。それで、ノルマを増やしました。そして、神を認めない者にとっては、主を礼拝をしたいという言葉は、「偽りのことば」にしか聞こえませんでした。主を礼拝するということは、神を認めない世には、偽りにしか聞こえないのです。

2B ますます増える苦しみ 10-17

10 そこで、この民の監督たちとかしらたちは出て行って、民に告げた。「ファラオはこう言われる。

『もうおまえたちに藁は与えない。11 おまえたちはどこへでも行って、見つけられるところから自分で藁を取って来い。労役は少しも減らすことはしない。』12 そこで民はエジプト全土に散って、藁の代わりに刈り株を集めた。13 監督たちは彼らをせき立てた。「藁があったときのよう、その日その日の仕事を仕上げよ。」14 ファラオの監督たちがこの民の上に立てた、イスラエルの子らのかしらたちは、打ちたたかれてこう言われた。「なぜ、おまえたちは決められた量のれんがを、昨日も今日も、今までどおりに仕上げないのか。」

自分たちで探すということで、藁だけでは間に合わず、代わりに刈り株を集めています。考古学者は、煉瓦の跡で、低い部分には藁を使い、中間の部分に藁と刈り株を使い、上層部は泥だけを使っているものを見つけたそうです。それでも、割当量は満たすことができなかったので、打ちたたかれています。

15 そこで、イスラエルの子らのかしらたちは、ファラオのところに行って、叫んだ。「なぜ、あなた様はしもべどもに、このようなことをなさるのですか。16 しもべどもには藁が与えられていません。それでも、『れんがを作れ』と言われていました。ご覧ください。しもべどもは打たれています。でも、いけないのはあなた様の民のほうです。」17 ファラオは言った。「おまえたちは怠け者だ。怠け者なのだ。だから『私たちの【主】にいけにえを献げに行かせてください』などと言っているのだ。

先ほどの監督たちとかしらがついて、そのかしらたちの下には、イスラエル人の頭たちがいました。彼らは、自分たちがノルマを達成できないのは、あなたの民、エジプト人が藁を与えないからだとして訴えました。しかし、彼らは衝撃的なことを聞きます。エジプト人が悪いからではなく、その命令をファラオ自身が行っていたことに気づいたのです。

出エジプトの歴史は、そこから出て来ることが、キリストによる罪からの救いの予型として新約聖書では語られています。(1コリント 10:1-4 等)この世に生きているということは、そこに罪というのが骨の髄までしみ込んでいて、その中から離れられない奴隷のようになっているとして、描いています。そして、エジプトから出るといのは、その罪から救い出すキリストの働きによって、神に仕える、神の民になることを意味しています。「ヘブル 2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」しかし、そこから主が離れさせようとする働き、救いの働きを始められるものなら、反対する勢力が動き、状況が悪化することさえあるのです。

### 3B 神への訴え 18-31

18 今すぐに行って働け。おまえたちに藁は与えない。しかし、おまえたちは決められた分のれんがを納めなければならない。」19 イスラエルの子らのかしらたちは、「おまえたちにその日その日

に課せられた、れんがの量を減らしてはならない」と聞かされて、これは悪いことになったと思った。20 彼らは、ファラオのところから出て来たとき、迎えに来ていたモーセとアロンに会った。21 彼らは二人に言った。「【主】があなたがたを見て、さばかれますように。あなたがたは、ファラオとその家臣たちの目に私たちを嫌わせ、私たちを殺すため、彼らの手に剣を渡してしまったのです。」

イスラエル人の頭たちがファラオのところに行った時に、モーセとアロンはその外で待っていたのでしょう。話が終わって戻って来たところで、モーセとアロンがいました。そこで、二人を非難したのです。彼らの感情では、自分たちを過労で死なせるのではないか？というものだったので、「私たちを殺すため、彼らの手に剣を渡してしまったのです。」とっています。

イエス様を信じたら、かえって状況が悪くなるということがしばしば起こります。四つの種類の土に種を蒔く喩えにおいても、御言葉を喜んで聞いたけれども、試練や困難があつて信じるのをやめちゃう岩地の話がありますね。イエス様は、まことの平和と安息を得るために、一時的にこのような剣が来るような出来事が起こることを言われました。「マタ 10:34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思つてはいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。」しかし、その霊の戦いが起こることを知らない時には、イスラエル人のように、「余計なことをしてくれたものだ」と思ってしまうのです。

22 それでモーセは【主】のもとに戻り、そして言った。「主よ、なぜ、あなたはこの民をひどい目にあわせられるのですか。いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか。23 私がファラオのところに行って、あなたの御名によって語つて以来、彼はこの民を虐げています。それなのに、あなたは、あなたの民を一向に救い出そうとはなさいません。」

ここに、モーセの優れているところがあります。それは、「【主】のもとに戻り」というところです。彼はここで不平を鳴らしているではありません。むしろ、他のところに行って、不平を鳴らすのではなく、これらのことは主が許されているから起つているのだということを知っていたのです。そして、自分には負いきれない重荷であるので、主に持って行っているのです。主のところに行くのであれば、必ず主が答えてくださいます。主のところに思い煩いを持って行かないので、信仰が弱くなり、離れてしまうことさえあるのです。

主に仕える時、主に用いられる時の試みは、ここのモーセの言葉にあります。「いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか。」とモーセは言っていますが、3-4 章でモーセは他の人を遣わしてくださいとお願いしていたのです。けれども主が命じられるのだから、やって来たところが、正反対のようなことが起こります。「なぜ？」と尋ねたくなります。それから、「言われていることが、起つていない」という葛藤があります。主が約束されていたことが、起つていないどころか、その反対に見えるようなことが起つていますとつたえています。

## 2A それでも働かれる神 6

そこで必要なのは、「信仰」です。主は、「なぜ？」という言葉には答えておられます。「今に見ていなさい、わたしが行くから。」としか答えられません。こうやって主を信じ、主が何かを行われていることを信じます。そして、「わたしが命じることを行ないなさい」と言われます。理解することはできなくてもよいのです、神が命じられていることを行なえばそれでよいのだ、というのが、私たちが神の召しによって生きる道です。

### 1B 「わたしは主」 1-13

1 【主】はモーセに言われた。「あなたには、わたしがファラオにしようとしていることが今に分かる。彼は強いられてこの民を去らせ、強いられてこの民を自分の国から追い出すからだ。」

主がモーセを励ましています。ここで大事な言葉は、「今に分かる」であります。たった今は分からない、けれども分かるようになると保障してくださっています。ここで必要なのは信仰なんですね。預言者ハバククに対しても主が同じことを言われていました、「2:3-4 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ。彼の心はうめぼれていて直ぐでない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」

そして主が、イスラエルの民を救われる方法が、「強いられて」というところに表れています。ファラオは、「はい、わかった。去らせてあげよう。」とは言わないと言っています。ファラオが頑なにして、拒絶しているからといって、それで主が何も行なっておられないのではなく、むしろ主は、その頑なさを使って、ご自分の救いを実行されることを計画しておられたのです。反対の勢力を、計画を推進する力とされます。柔道において、小柄な人が巨体の人を倒す術があるわけですが、それは相手の力に対抗するのではなく、むしろ使って倒すからそういうことができます。神は、反抗や拒絶という力さえも使うことのできるかた、悪を善に変えることができになる方です。

2 神はモーセに語り、彼に仰せられた。「わたしは【主】である。

主は、これからご自分が行われることを語られます。そこには、誰か人間が介在してその働きを助ける余地など全くないように、神ご自身で物事を運ばれます。その根っこにあるのは、「わたしは【主】である。」という言葉です。そして 8 節で話し終わられる時にも「わたしは主である」と同じ言葉で終えています。主が主役であり、主が主体であり、この方が主であるから、あなたがたは文句を言うな、というような一見乱暴に見える言葉こそが、答えだったのです。しかし、それは乱暴ではなく、「わたしは主であるから、あなたがたはわたしに任せなさい」という励ましであり、信頼への呼びかけなのです。

3 わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、【主】という名では、彼らにわたしを知らせなかった。4 わたしはまた、カナン之地、彼らにとどまった寄留の地を彼らに与えるという契約を彼らと立てた。5 今わたしは、エジプトが奴隷として仕えさせているイスラエルの子らの嘆きを聞き、わたしの契約を思い起こした。

主はここで、明確にアブラハム、イサク、ヤコブの時から大きく時代が変わっていることを語っておられます。また、以前とは異なり、もっと身近に主が関わるようにされたことを教えておられます。父祖の時には、「全能の神として現れた」のです。エル・シャダイであり、それは母の乳を表すことばです。乳飲み子のようにして抛り頼む存在です。

けれども、「【主】という名では、彼らにわたしを知らせなかった。」と言われます。これは契約を結び、実際に契約通りに動かれる方ということでもあります。アブラハムとイサクとヤコブには、その契約を結ばれましたが、その内容を実行していたわけではありませんでした。それは、モーセの時代のイスラエルの民のものだったのです。この御名には、「～になる」という意味合いがあります。必要であれば何でもそれになる、という意味合いであり、本当に近くにおられ、細かいことにも関わってくださり、全生活が神の命令とご臨在の中で行われるという生活です。ですから、出エジプト記から、族長の生活以上にあまりにも近くに来てくださり、彼らの生活と共に生きてくださる方になってくださるのです。私たちには、イエス様の御名によるご臨在があります。イエス様ご自身が、「わたしは命である」「わたしは命のパンである」「わたしは道である」「わたしは世の光である」と、私たちの全てになってくださいました。それだけ近づいてくださり、新約聖書にはキリスト者たちに対する命令がたくさん書かれています。

6 それゆえ、イスラエルの子らに言え。『わたしは【主】である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。7 わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。あなたがたは、わたしがあなたがたの神、【主】であり、あなたがたをエジプトでの苦役から導き出す者であることを知る。8 わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地にあなたがたを連れて行き、そこをあなたがたの所有地として与える。わたしは【主】である。』

「わたしは主である」と言われた後で、わたしは～と、主ご自身が主語となって、これこれを行うと言われていきます。しかも、ヘブル語の自制では完了形になっていて、もうこれこれを成し遂げたというような言い回しになっています。主は、まったく人間の営みに左右されることなく、ご自分の願われているように、御心のままに事を行われる方なのです。私たちは、主がなさっていることの中で、その憐れみの中で生かされていくものたちであります。

まず、苦役から救い出し、贖い出すという働きです。この時に、「伸ばされた腕と大いなるさばき

によって」行われると言われます。モーセとアロンがファラオの前で無力を感じたのですが、けれども、主の力によれば強くなれます。私たちの福音の働きは、聖霊の力なくしては何もすることができません。そして、私たちの目には見ることはできませんが、主イエスの救いは霊的な大いなる力が働いた出来事でした。「コロ 2:13-15 背きのうちにあり、また肉の割礼がなく、死んだ者であったあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださいました。私たちのすべての背きを赦し、私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」これが、私たちの福音であり、私たちが救う神の力です。

そして、力だけでなく、人格的に神を知る恵みにあずかります。「わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。」とあります。救われるのは、あくまでも目的があるからであり、目的なしに救われても意味がありません。目的とは、神が私たちの神となり、私たちが神の民となるという、人格的な、親しい結びつきです。イエス様は、神とご自身を知ることが永遠の命と言われました。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

そして主のご計画は、彼らを約束の地に導くことです。主がアダムを造られた時の約束、地を支配するということを、イスラエルの子孫に与えられ、そして異邦人にもキリストによって神の国を受け継ぐようにして下さっています。私たちの日々の生活は、タラントが預けられてそれを使って商売をしているようなものであり、後に御国を受け継ぐ時に多くのものを任されるようにすることです。

9 モーセはこのようにイスラエルの子らに語ったが、彼らは失意と激しい労働のために、モーセの言うことを聞くことができなかった。

以前はモーセとアロンを非難するだけ、まだ良かったのかもしれませんが。今は失意と激しい労働によって、聞くことさえできなくなりました。私たちが神の御声を聞けなくする敵が働いています。言いま、自分のしていることで精いっぱいになってしまう、また「失意」または落胆している心は、主の希望の声をはねつけます。

10 【主】はモーセに告げられた。11 「エジプトの王ファラオのところへ行って、イスラエルの子らとその国から去らせるように告げよ。」12 しかし、モーセは【主】の前で訴えた。「ご覧ください。イスラエルの子らは私の言うことを聞きませんでした。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。しかも、私は口べたなのです。」

主は、ご自分が計画していて、後はわたしの命令を聞くだけなのだとされているのですが、モ

一セ自身が、召された時に言った言葉を繰り返しています。「私は口べた」だと言っています。これは、無割礼だというのが元々の意味です。人々に聞いてもらうような口が開かれていない、ましてやファラオに聞いてもらえるような口はない、ということです。

13 【主】はモーセとアロンに語り、イスラエルの子らをエジプトの地から導き出すよう、イスラエルの子らとエジプトの王ファラオについて彼らに命じられた。

この内容は7章の前半に書いてあります。主が語られ、そして彼らはその通りに行っていきます。けれども、彼らがイスラエルの指導者、預言者として建てられるにあたって、主は、彼らを系図の中で位置付けます。これまで、主のしもべとして、アブラハムが召された時も彼の系図が記されていました。この後も、ダビデの時代に同じように彼が主のしもべとして用いられるに当たって、系図がありました。ルツ記の最後ですね。

#### 2B モーセとアロンの系図 14-30

14 彼らの一族のかしらたちは次のとおりである。イスラエルの長子ルベンの子はハノク、パル、ヘツロン、カルミで、これらがルベン族である。15 シメオンの子はエムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ツォハル、およびカナンの女から生まれたシャウルで、これらがシメオン族である。16 家系にしたがって記すと、レビの子の名は次のとおり。ゲルシオン、ケハテ、メラリ。レビが生きた年月は百三十七年であった。

ヤコブから先に生まれた、ルベン、シメオン、それからレビまでの系図です。モーセとアロンは、レビ族から出ています。モーセとアロンの系図を示すので、その後のユダの話はしません。シメオン族には、カナン人の血が混じっている人がいます。ユダの系図にも、タマルというおそらくはカナン人が混じっていました。これはあってはならないことでしたが、人の失敗をも憐れみと恵みの中で系図に入れてくださっています。

17 ゲルシオンの子は、氏族ごとに言うと、リブニとシムイである。18 ケハテの子はアムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルである。ケハテが生きた年月は百三十三年であった。19 メラリの子はマフリとムシである。これらが、彼らの家系によるレビ人の諸氏族である。

レビから出た息子にしたがって、三つの氏族が出てきました。ゲルシオンとケハテとメラリです。民数記において、それぞれの氏族に幕屋の各部分を運ぶ働きが与えられます。ケハテ族が、幕屋の中にある祭具を運ぶ奉仕が与えられますが、ケハテの息子がアムラムであることが書かれています。アムラム自体も、それが家系となり、そのアムラム家系からアロンとモーセが生まれます。

20 アムラムは自分の叔母ヨケベデを妻にした。彼女はアロンとモーセを産んだ。アムラムが生き

た年月は百三十七年であった。

ここでの「アムラム」は、18 節のアムラムとは違います。なぜなら民数記で既に、ケハテ氏族の人数が一月以上の男子で 8600 人いると書いてあります(3:28)。そして 3 章 27 節には、「アムラム族」と書かれていて、アムラムという家族の家系であることが分かります。

21 イツハルの子はコラ、ネフェグ、ジクリである。22 ウジエルの子はミシャエル、エルツァファン、シテリである。

18 節のケハテの息子二人からの子です。

23 アロンは、アミナダブの娘でナフシヨンの妹であるエリシェバを妻にし、彼女はアロンにナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを産んだ。

アロンから、アロン家系で祭司職が出てきます。ナダブとアビフは異なる火を捧げて殺されてしまいますが、エルアザルとイタマルによって祭司の直系が始まります。

24 コラの子はアシル、エルカナ、アビアサフで、これらがコラ人の諸氏族である。

コラもケハテ族から出ています。なぜここに書かれているかというと、コラの反乱の事件が起こるからです。民数記に書かれていますね(16 章)。このようにして、神はご自分が強く関わった者たちを、それが悪いことであっても教訓として残しておかれるということをします。

25 アロンの子エルアザルは、プティエルの娘の一人を妻とし、彼女はピネハスを産んだ。これらがレビ人の諸氏族の、一族のかしらたちである。

アロンが死にエルアザルに引き継がれることが民数記に書かれており、そしてその息子のピネハスも、イスラエルの民が神に裁かれているさ中に、その妬みを体現して不品行を行なっている男女を殺したというところで、彼の行ったことが記念されます。

26 このアロンとモーセに【主】は、「イスラエルの子らを軍団ごとにエジプトの地から導き出せ」と言われたのであった。27 エジプトの王ファラオに向かって、イスラエルの子らをエジプトから導き出すようにと言ったのも、このモーセとアロンである。

ここで明確に、モーセとアロンに主が語られたことを記録しています。主が語られたのに、それでも反抗する者、否定する者が出てきて混乱が起こらないにしています。主に選ばれる、召されると

いうものはこういうものです。自分たちで勝手にいじくって、この人がなればいいのかというものではありません。

28【主】がエジプトの地でモーセに語られたときに、29【主】はモーセに告げられた。「わたしは【主】である。わたしがあなたに語ることをみな、エジプトの王ファラオに告げよ。」30しかし、モーセは【主】の前で言った。「ご覧ください。私は口べたです。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。」

先ほどの言葉の繰り返しです、実はこれは7章の前置きになっています。7章において主が語られる言葉で、モーセはようやく主の命令を行うことに決めます。

私たちはある意味で、このことの繰り返しでしょう。世において反対が強いので落胆し、失意の中に落ちてしまいます。けれども、そこで踏ん張って主のもとに行くのです。主が事を運ばれているのです。その言葉を聞くために、私たちは立ちあがって祈り続けたいといけません。